

忘れ去られているものの記憶

加藤 信朗

あなたは知<sup>ソビエ</sup>慧を告<sup>ア</sup>げ知らせ、賢<sup>プロネシス</sup>慮があなたに聴<sup>ス</sup>き従うために、

*Sù tñu sofíau khrúfēis íva phōnōtis soi ítakōōn.*

『箴言』八・一（『七〇人訳ギリシャ語聖書』）

知識が世に満ち溢れ、知<sup>ソビエ</sup>慧が見えなくなっている現代、知<sup>ソビエ</sup>慧に心をよせ、知<sup>ソビエ</sup>慧に聴<sup>ス</sup>き従おうとするもの（＝賢慮をもつもの）が一人でもあることを願いたい。

忘れているもののあることを覚えていっているということがどうしてあるのだろう。忘れ去られているのなら、記憶していることはないはずだ。しかし、おそらく、人は誰しも自分に大切だった何かを自分が忘れ去っていたという経験をもっているのではないだろうか。人間にとって「生きる」とはそういう「記憶」のうちに生きることだ。「なくした銀貨をさがす女」のイエスの喩えを、アウグスティヌスはそう理解して、その「記憶論」を綴った。そして、「人は誰も幸福でありたいと願う」というギリシャ実践哲学の原理を、このイエスの喩えになぞらえて解釈した。なぜなら、完全な幸福への願望をすべての人は共有しているが、世に生きる人には、それが何であるかが隠されているからだ。

しかし、どうして、ひとはこの完全に忘れ去られているものを思い出せるのだろうか——またしても、ひとはアポリアのうちに落ち込む。そこで問われる、「あなたは欺かれていることを望むのか」と。誰も欺かれたまま幸福だと思ひ込むことを望むものはいない。こうして、「忘却の記憶」と「真実の探究」が結ばれるところで、「真理そのもの」である「神のうちにある幸福」の探求の道へとひとは出で立たしめられる。それは、わたしたち一人一人が、いま、ここに、置かれている「自己自身の存在」の何であるかを問うことであり、「わたしたち一人一人が、いま、ここに、あることを根拠づけている「真理そのもの」である「神」を問うこと、その「神の内における知慧」を問うことである。すべての教父はこの探究の道にみずから置いた、いやむしろ置かれていた。

どのような形であれ、すべてが分かかってしまっているという思い込みとおごりにより、真の「ただしさ (dikaiosin)」は失われる。ひととひとを結ぶ「いづくしみ (dilectio)」のきづなが断たれ、「救し」が失われる。

墮落した街に神の怒りが下ろうとした時、アブラハムが神に願ったねぎりの「とりなし」がわたしは好きだ。「五十人のただしいひとがいいたら、救ってくださいますか。」四十五人、いや四十人とだんだんねぎって、十人のただしいひとがいなかったために、この街は神の怒りの火で焼かれたという。しかし、この物語は「一人のただしいひと」(ルカ二三・四七)によって全地表の人類が救われることを約束する神の祝福の予表なのだ。

「東西」の隔たりという偏見から自由になりたいと願う。「東」と「西」は「同じ一つの円環」のうちにあって一つであり、全世界 (orbis terrarum) は一つに結ばれている。この普遍の世界を照らしている同じ一つの光りを求めたい。

世は暗い。でも、光りは照っている。主の言葉に従って「仰せのように、(未来に向かって)もう一度網を打ちましょう」(ルカ五・五)と答えた使徒たちに倣いたい。

「教父研究会」が創立三十周年を迎えるという。それを準備した「アウグスティヌス研究会」から

数えれば、その歩みは四十年を越えるだろう。その記憶をたぐってみると、わたしたちはずいぶんたくさんの大切なことを忘れているのに気づく。でも『パトリスティカ』の創刊後、わたしたちの研究のその場その場の歩みを克明に記した討論の記録を添えるこの小冊子は、この世界に「教父研究」の確乎とした一つの道を開きえたと信ずる。すべての会友の粘り強い真摯な努力の積み重ねに心から感謝するとともに、今後とも変わらぬ、いっそうの発展をみなさまとともに祈念したい。